

# 池田文書の研究 (47)

## 医師の書簡 (その6)

### 池田文書研究会

#### [86] 多田真碩<sup>まさせき</sup>の書簡

多田真碩は東京上野広小路の開業医。

1 明治 年4月15日 (1983)

一翰拜呈仕候、追々春暖之氣候ニ御坐候処益御壯健ニ御起居被遊珍重之御儀ニ奉存候、陳は平日は意外ニ御無音申上重々多罪々々伏て御有怨奉仰候、就ては此秋山和四郎ナル者小生方ニ三四年間入塾有之、今般御邸へ入門之上一層医学勉強致度旨申出候間本人は実直之者ニ付即本人差上候間、当人願之通り入門御採用被下候ハ難有仕合ニ奉存候、実は小生同道にて可願上之處、以書中願上甚失敬之段偏ニ御有怨可被成下候、委細は近日参館之上万端可申上候、恐惶謹言

四月十五日

多田真碩

池田先生 虎皮下

尚々御隠居様御奥様へ宜敷仰上成可被下候、以上

2 明治 年2月21日 (1982)

一簡拜呈仕愈御清適奉欣然候、陳ハ尔来は意外ニ御無音申上候、就テハ加藤家雲林院様昨日来俄然惡寒発熱心気亢盛呼吸困難食欲欠損シ余程大患之模様ニ御座候間 自分柄嘸々御多忙中ニは被為在候得共、本日午后先生御尊来之上御高診ヲ仰度此段貴君ヨリ是非御頼被下度、委細は拜顔之上万々可申上候、頓首

二月廿一日

多田真碩

渡辺和四郎(欠) 机下

#### [87] 親康頼吉<sup>ちかやすらいきち</sup>(来吉)の書簡

本書簡は来吉とのみ署名あり、侍医(京都駐在)親康頼吉(来吉)と思われる。

1 明治 年9月1日 (1085)

謹呈、残暑之砌御坐候処、益御清祥奉賀上候、陳ハ大野百合子様<sup>(1)</sup>御病症之経過ハ宜シキ方ニシテ熱度最高三八・〇度ニ御坐候、合併症モ無之様存候故漸次御快癒之事ト愚考仕候、然ルニ芹沢のぶ子殿数日前ヨリ発熱三九、乃至四十度ノ間ヲ昇降シ未ダ血清反応<sup>(2)</sup>ハ試ミ不申候得共同様之疾患ト愚案ヲ抱キ居申候、就テハ消毒上之事ハ兼テ充分御咄ハ仕居候故手落ハナキ事ト存候モ此上ニ感染者出来申候テハ御互ニ不利益之事ト相考候付、此際嚴重之予防法為講度候付、御同家ニ於テ一室ニ隔離シ、此ニ看護婦ヲ付スルカ、或ハ入院方法之手順ヲ取ラル、カ兩者之内ニ至急取極度候間、甚ダ失礼之事ニ存シ奉リ候間、何卒先生閣下ヨリ適宜御指図被成下候様御願申度候、小子モ乍蔭大ニ心痛罷在候、先ハ用事ノミ得貴意候、拜具

九月一日 夕刻

来吉

池田先生 閣下

(1) 大野百合子 池田謙齋の長女 大野敏子の長女。

(2) ビダール反応 症状及びその処置から見て腸チフスカ。

#### [88] 津久井文讓の書簡

津久井文讓は群馬県前橋の医師。

1 明治11年 月 日 (2072)

昨明治十年八月月中子宮病ヲ患ヒ略治体ニ際シ尋テ気管支炎ニ罹リ爾後気管支痙攣ヲ併発シ一日或ハ隔日ニ恰モ喘息ノ如キ発作アリ、間歇時ハ唯僅ニ咳嗽喀痰アルノミ、脈搏呼吸体温共ニ異状ナク大小便モ亦然リ、発作ハ概ネ夜間ニシテ前兆ナク忽

咳嗽盛ニ呼吸困難容色慘怛トシテ肋骨及ヒ肩胛ヲ翼張シ聴診スレハ笛声ヲキク、其時患者起坐シ身ヲ前ニ屈シ平臥スル不能、発作時間ハ一二時或ハ四時ヨリ五時間ノ長キアリテ一定セズ

右患者ハ医師四五名ヲ経テ当県衛生所長大久保適齋君ニ診察ヲ請エリ、同氏ハ沃度保児母硫酸規尼涅等ヲ用イ発作中ハコロラルヒドラー<sup>(1)</sup>ノ大量ヲ用イタリ、小生ノ依頼サレシハ数日前ナリ、小生ハ大麻丸ニ強壯剤ヲ加エテ与エリ、発作中ハ不得止コロラルヒドラーヲ用ユ

前橋 医師 津久井文讓

(1) コロラルヒドラー<sup>ド</sup> 鎮静催眠剤.

2 明治 年1月24日 (2071)  
贅言略候、御海恕可被下候、陳テ過日容体書ヲ以テ御尋問いたし候患者之義、当今ニ至り少々は良徴相見エ候モ未ダ発作ノ度数ヲ減スルニ不至、依テ恐縮ながら御考按之上喘息ノ発作ヲ減スルノ御処方御投じ被下度候、早々頓首

一月廿四日 津久井文讓

池田謙齋先醒

二白、過日より牛乳ヲ用イシ故か、生活力ハ稍増多セリ

### [89] 坪井為春の書簡

坪井為春は蘭方医坪井信道に学び、その養子となる。埼玉県医学校々長。為春の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1通掲載。未掲載分を記す。

2 明治 年10月18日 (3319)  
謹稟、繁霜之候益御清穆被為在奉恭祝候、陳ハ千葉県上下総望陀郡大戸見村、武山鑿之助倅慎吾ナル者埼玉県旧医学校自費生ニテ卒業、既ニ内務省開業免状交付ニ相成候処、未熟ニ付今般先生閣下ニ隋從シ猶一層實際研究仕度ト申出候、同人事是迄無事之人物ニテ医学篤志之者ニ御座候間、無御支障候ハ、御許容被下入門之御規則御垂示被下度奉願候、頓首

十月十八日 坪井為春 拜

池田大先生 閣下

再伸、兼て御配意被下候瀬ヶ崎武崎八郎妻先日風烈之節少々痙攣相発候処、其後引続軽快漸々消食器整復仕候得共、大患後衰態甚シク万全迄就床罷在候、乍憚御安省被下度候也

### [90] 中井常次郎

中井常次郎は旧大名家の掛り付け医師。常次郎の書翰は、奥平昌邁<sup>まさゆき</sup>の関連書簡(日本医史学雑誌第55巻第3号)に4通、蜂須賀茂韶<sup>もちあき</sup>の関連書簡(日本医史学雑誌第56巻第1号)に1通掲載した。未掲載分を記す。

6 明治 年2月14日 (2162)

拜呈、渡辺氏段々御配慮を蒙候処、遂ニ今午后六時死亡仕候、扱て先日御診察之后翌日より実菱<sup>(1)</sup>十二グレインを用初候得共十三オンスニ減尿ス、下肢之浮腫を増し且ツ癰瘡厥冷大紫斑を発し言語渋滞脈百七、息三十七、漸次呼吸促迫遂ニ昏睡ニ陥り余り苦痛無之候、右不取敢報告申上旁重々之御尽力を奉鳴謝候、早々拜具

二月十四日 中井常次郎

池田先生

(1) 実菱<sup>じき</sup> ジキタリス。利尿・強心剤。

7 明治 年2月24日 (2163)

(封筒表) 池田謙 哉 殿<sup>(マツ)</sup>

(封筒裏) 中井常次郎

拜呈、昨日は早速御来診被下難有奉謝候、尔后別段異状無之候得共、昨午后十一時体温三十九度七分、本日午前二時頃悪寒之模様にて依て直ニ三時ニ塩規尼十五グレイン頓服被取計候由、同午前八時 三十八度九分、同午后三時 四十一度二分五リン、脈百十一、息三十一、同六時 四十度五リン、脈九十八、尤も午前より少々桃紅色之粘痰を四五回咳出せるも之ニ応ずる診候を胸中ニ相認不申、只々左腋下下部ニ細水泡音状のものを幽聴仕候、[痛ハ軽也]、同午前十時大便快通其状濃黄ニして硬軟中等、小便濃黄赤色今朝来四回、但し昨日検尿仕候処強酸ニして蛋白無之候、(食欲失乏、精

神之様模<sup>(ママ)</sup> 昨日同様ニ御坐候、右之通ニ御坐候間  
鳥渡御通報申上候間御電覽被下度、早々謹言

二月廿四日夜 中井常次郎  
池田先生

[91] 長井長義の書簡

長井長義は東大教授として理学部で化学、医学部で薬化学を教え、内務省衛生局東京試験所々長をも兼任。長義の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に2通掲載に付き省略。

[92] 中川良二の書簡

中川良二は種痘医。

1 明治 年4月16日 (2168)  
尊書兩通詳ニ拝読、孰レ明十七日午後参殿日栖之御引合可申上候、貴答勿々頓首拝  
四月十六日 中川良二  
池田先生 坐右

2 明治 年7月16日 (2169)  
昨日は御尊来之所御龜末御高免奉仰候、今朝竹井御老公別紙入籍願書御持参ニて小原君<sup>(1)</sup>之捺印相願度趣ニ付、即別紙差上候間、乍御手数小原君之御調印相成候様方願上候、勿々頓首拝  
七月十六日 中川良二  
岩元小平太様<sup>(2)</sup>

(1) 小原静 池田謙齋の門下生。謙齋の代診を勤める、明治21年頃竹井家の養子となり竹井静と改姓する。20年侍医局勤務。37年侍医補。

(2) 岩元小平太 池田謙齋の義母久子の弟

[93] 長坂周二の書簡

長坂周二は尾張名古屋出身の医師・書家・漢詩人。周二の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に5通掲載。未掲載分を記す。

6 明治 年8月3日 (76)  
拝啓、炎熱甚しく候得共愈御清適被為入奉恐賀

候、陳は兼々御配慮被下置候徳川家患者、先々諸症依然罷在候処、昨今ハ稍ヤ咳嗽相加候得共、熱度ハ三十八度五分ヲ以テ高度として、或ハ七度八分、或ハ八度位、尤朝夕一度ノ昇降有之候、脈搏ハ是迄一百以上ヲ質シ候処、一兩日来ハ九十代、本日ハ八十八次ニ御坐候、実芝ノ為メカと奉存候、就ては甚申上兼候得共、何卒今一度御来診被下置度奉願候、時節柄御繁忙候ハ、至急尊来相願兼候ハ、御処方ノ処ハ如何、最早実芝ハ休止仕、単ニ吐根浸のミ相用ひ可申候哉、此段御指揮奉仰候、書外在拜眉、頓首

八月三日 永坂周二  
池田先生 閣下

7 明治 年7月16日 (2286)  
拝啓、然は今朝参上可仕旨申上置候得共、本日午後ニハ尊来も被下置候由ニ付、御多忙中罷出候も却テ御妨ケと奉存候間、差扣申候間、此段可然御領承奉願候、頓首

七月十六日 永坂周二  
池田先生 御左右執事

[94] 長瀬時衡の書簡

長瀬時衡は岡山出身陸軍々医監。長崎にてボードウィンに学ぶ。軍医本部庶務課長勤務時明治18年2月12日1等軍医正に昇任。東京衛戍病院長勤務後仁寿病院開業し西洋按摩術<sup>マッサージ</sup>の嚆矢をなす。

1 明治18年2月17日 (2209)  
属在至親贅語不陳啓は小官此般昇任仕候ニ付聊為表微忱、来廿二日〔日曜日〕於築地寿美屋祝酒献酬仕度御煩勞相懸候得共午后四時より御枉駕被下度此段俯て所希候也、草々頓首

明治十八年二月十七日 長瀬時衡 頓  
池田謙齋様

追て廿日迄ニ御諾否御一報奉願候也

2 明治 年2月23日 (2208)  
御清寧奉賀候、秦野生之懇家川崎駅之住嶋田武七之母歳六十六、曾テ気管かたるニ係居候所、今月初旬よりマラリヤ熱ニ冒サレ胃かたるヲ兼発シ衰

弱罷在候、就てハ先生之御一診懇願致候、御繁忙之上且遠地之所御苦勞奉存候得共半日之御線合ヲ以て御光臨被下度奉願上候、則孝子武七ヲ以て參堂御願申出候間情意御聞届被下度、余は拜姿之上可申齎候也、恐々頓首

二月廿三日

長瀬時衡

池田大先生 閣下

(別筆にて封筒表に「長瀬時衡 軍医監」とあり)

### [95] 中村舜吾の書簡

中村舜吾は軍医本部庶務課勤務。軍医補。

1 明治13年5月4日 (2180)

証

一、金 貳円

右は熊本鎮台在勤軍医補儀義守死没候ニ付弔祭料之内え御恵投相成、正ニ遺族之者ニ相送可申此段御請迄申進候也

明治十三年五月四日 軍医本部庶務課々僚

軍医補 中村舜吾

軍医監 池田謙齋殿

### [96] 中山徳輝<sup>ゆきてる</sup>の書簡

中山徳輝は典薬寮が廃止される明治二年まで典医を勤める。妻まさは高階経徳の妹。父曄<sup>アキラ</sup>は皇女和宮の主治医として江戸へ下向した。又次男の平次郎は明治後期から昭和初期にかけての病理学者であるが、一般には考古学者として有名。

1 明治 年9月13日 (2197)

残暑厳敷御座候処、益御安泰珍重奉敬賀候、然は今川小路二丁目三番地田中国長ト申者は小生知人ニ御座候処、過日来肺患ニて一同心配罷在、何卒先生之御高診ヲ仰度直願仕候ニ付本日ニは限ラス候ニ付、両三日之内御一診被成下度此段奉願候也

九月十三日

中山徳輝 拜

池田先生 閣下

### [97] 長与専齋の書簡

長与専齋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に65通掲載に付き省略。

### [98] 半井英輔<sup>なから いえいすけ</sup>の書簡

半井英輔は明治12年東大医学部卒業。東大勤務中ドイツ人教授シュルツに嫌われ明治14年頃和歌山県医学校に転任。同校が明治21年3月廃校となる時校長を勤める。

1 明治14年5月3日 (2294)

華嶺謹奉拜啓候、尔後玉体倍御安泰可為在御起居奉遠察候、已ニ無此迄御動静可奉伺之所何分創業之際ニ有之甚極多忙不図も御疎濶ニ相過候段御寛恕偏ニ奉哀願候、扱て在校中ハ特別ナル蒙御鞭撻御蔭を以て漸卒業御鵠恩之程已ニ不知所謝、然ルニ又愚方を憐ミ医局奉仕被仰付、実ニ粉骨碎身勉務可仕之所不才終ニ不能堪重任候て無抛免職奉願候<sup>(1)</sup>、折柄幸ニ和歌山県之招聘を蒙リ又魯鈍を不顧シテ案ニ応聘仕候、赴任後ハ唯ニ校名ヲ不洗御鵠恩不背様蚤夜苦慮黽勉罷在候、然処当節ニ至り患者も逐々増息シ未タ着官失策不仕候て病院を其旧況ニ保支仕得候段全ク御校之賜ト深ク肺肝ニ銘し奉感謝候、先は御礼状差上度折角天時御自重緊切奉存候、勿々謹白

五月三日

半井 再拜

池田先醒 閣下

二伸、過日当地之物産不珍敷奉存候得共酸魚二桶差上候所、最已御落手被成下候半と奉存候得供、問屋之不都合屢ナル事聞及候ニ付為念奉伺候、以上

(1)『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻(53頁)石黒忠恵の書簡中に関連記述あり。

2 明治 年5月23日 (2293)

拜啓仕候、近来ハ打絶御無音罷在甚以背本意候、先以錦台愈御清穆御奉務被遊候段珍喜不斜奉遥賀候、二ニ野子都合無異碌々所勤仕候間、乍憚御省念被遣度候、陳ハ此度県官星野生登京ニ付てハ種々同度儀有之、伺候可仕ニ付御多端中奉恐入候得共、御間隙を以御面会被下、一通り御聞取之上可然御指揮被下度奉願候、先ハ為其尚上も疎、時下玉体御保護專要ニ奉存候、頓首謹言

五月二十三日

半井生 拜

二白、<sup>(ママ)</sup>幾<sup>(ママ)</sup>応<sup>(ママ)</sup>御白玉肝要奉存候、当節ハ愚息等試  
 検中之由、何分ニも宜御引立奉願候、以上

池田先生 厩皮下

3 明治 21 年 5 月 21 日 (2292)

華牘奉捧呈候、尔後高台御一統倍御安泰被遊御起居候由、不堪<sup>(ママ)</sup>拵喜奉肅賀候、降て私儀仰せに従ひ和歌山医学校閉鎖迄首尾克勤メ了せ、一先帰省仕居候処、兼々御高配を煩候一身上之件不堪<sup>(ママ)</sup>関心候ニ付、過ル十三日郷里発途漸十六日着京仕候、就てハ毎々願出候も如何敷御坐候得共、何卒青木公ト被仰合、宜敷御引立之程伏て奉懇願候、右は拝謁御願可仕筈ニ御座候得共、目下愚兄大患に罹り居候ニ付、一二週ハ重て参館を不得候故、乍不遜此段以寸椿奉願候、先ハ時下御伺旁右御願申上度如斯ニ御座候、恐々敬具

五月廿一日 半井英輔 再拜  
 池田先醒 台下

[99] 半井 <sup>さやか</sup>澄の書簡

半井澄は福井県出身、長崎にてボードウイン・マンズフェルトに学び京都療病院初代院長・京都府立医学校々長歴任後明治 19 年より 31 年まで待医局勤務。弘化 4 年生まれ明治 31 年没。享年 52。(1847-1898)

1 明治 年 8 月 7 日 (3164)

炎熱鎌金之節御坐候処、先生益御安康被為入奉拝賀候、陳ハ過般伊東先生ヨリ右大臣岩倉殿御病状御細示被下、御滞留中御用有之候節ハ御治療向負担可仕旨、且其治療方法御示被下并同先生御供奉中ハ先生ニ御指令相仰候様被申越了承仕、其後数回拜診仕候、御本症御頭痛ハ日々御増減有之候得共、概シテ御在京中ト大ナル御變不被為在候御模様御坐候、御示揮之臭剥・沃剥合剤〔二十グレイン・ハグレイン〕此間腸胃症被為在候節一週間御休業被為成候外ハ本日尚持重御服用御坐候、然ルニ此御本患之外著明ノ原由ナク軽度御痲疾〔初患ノ由〕相発候趣ニテ先月下旬拜診甘扁桃乳劑炭酸泉調上、本月上旬ヨリ御軽減相成、此頃ハ些少之御疼ト洩膿少々有之候而已御坐候、右御全快奉拜

察候、如此御容体ニ御坐候、付テハ此後本剤持重可仕ハ勿論ト奉存候得共、増量ヲ要スル義ニ候哉、御示揮奉候候、将亦平素御便秘有之、伊東先生御示之大黄<sup>(1)</sup> 芦薈<sup>(2)</sup> 丸調上候得共、動スレハ余効ヲ収ス、右大臣殿御好有之リチネ油兩三回調上仕候、尤モ中和塩下剤適当ト相考候、何等之薬剤可然哉、御示揮奉仰候、或ハ毎朝カル、ス塩大量如法持重仕候ハ、如何御坐候半、小生心得迄ニ奉伺候、元来御本患積年之御宿痾ニ有之、御勞神御過酒等之御誘因も有之、殊ニ如此非常酷暑之際御薬効自然著明ニ無御坐候事、万々拝察仕候得共、尚先生之尊按奉同度、御示教被成下候様奉願上候、此頃ハ非常ニ御減酒ニテ〔御痲疾以来〕一日一合之御分量ニ御坐候由ニ拝承仕候、先ハ一応御容体迄、且ハ此後御治療向ニ付、先生之尊按奉同度、如此御坐候、頓首百拜

八月七日 澄  
 謙斎池田先生 閣下

二白、当年ハ非常之暑氣ニ有之候折柄、不相變御多事奉恐察候、此表鴨川之納涼趁旧雜踏御推察可被下候

- (1) 大黃 <sup>だいおう</sup> タデ科の植物。下剤、健胃剤。  
 (2) 芦薈 <sup>ろかい</sup> アロエ。下剤。

[100] 半井成禎の書簡

詳細不明。書翰の内容より医師と推定した。

1 明治 年 10 月 1 日 (2290)

拝啓、追日秋冷相催候処、不相變御清穆御奉務奉欣賀候、二ニ小生依旧碌々送光仕候間、乍憚御省念被遣度候、陳過日森崎祐之帰県之節ハ華翰被給難有、同人も旅疲れ等ニテ一層之衰勞を増加仕候様子ニ候処、本日比ハ少々疲労復シ候得共、何分御承知之病氣故余後心痛罷在候、併引続キブーチャーセーレンハ相聴居候、陳又毎度御厄害之儀奉恐入候得共、県官佐藤忍妻積年之心臓病昨年来鉄製剤・実芝・臭剥之類断続服用致サセ、当去月来結膜虹彩炎ニ罹り施療之末、此度出京致シ御治療相願候様申聞せ候間、何卒可然御了承被下度、但同人角膜翳ハ従来有之候所、此度之眼疾同部え波

及仕翳も幾分歟相増候様被考候、且又同官員永田重妻も同病兼子宮腫瘤にて施療仕来り候末、同断出京仕候間、此亦可然御承諾被遣度奉祈候、先ハ前文拜願之為メ如此ニ御坐候、其内時下御愛玉肝要ニ奉存候、頓首敬白

十月一日 半井成禎

記

佐藤はし

一、塩酸キニーネ 三グレイン

水素還元鉄 六グレイン

右丸一日量トナス

永田須賀

一、一果コロール鉄丁幾 三十n

臭素加里 二十グレイン

水

右一日量トナス

兩人只今之用薬申上置候

池田先生 函丈

#### [101] 南部<sup>かずまさ</sup>一政の書簡

南部一政は天保13年山口県萩生まれ。明治8年宮内省3等薬劑生。10年より28年まで医員として宮内省・侍医局に勤める。

1 明治 年3月17日 (2342)

奉拜啓候、然は見坂杉竹二郎<sup>(1)</sup>昨年来神経性頭痛ニ有之、就ては先生ニ御一診相願度由ニ御坐候間、御都合次第一兩日之内御来診奉願候、猶大輔殿<sup>(2)</sup>御面会之節細敷御申聞セ可被下候、是又水楊酸<sup>(3)</sup>・沃度加里等試用仕候得共未タ全治不仕何卒御高按之上御指揮奉願候、右御願迄如此御坐候、草々不具

三月十七日 一政

謙齋先醒

(1) 杉竹二郎 子爵杉孫七郎長男。明治4年生まれ大正2年没。式部官。享年44。(1870-1913)

(2) 大輔 杉孫七郎。明治10年より宮内大輔。

(3) 水楊酸 サルチル酸。解熱劑。

2 明治 年1月11日 (2341)

奉拜啓候、然は昨日は遠路御苦勞相願、早速御来診被成下難有奉万謝候、從二位事も其後異状無之、併シ昨夜少々痛、今朝は先夜ニ比スレハ少々宜敷、就ては甚タ恐縮之至ニ御坐候得共明日御来診奉願候、余は拜眉之上可申上候、不備

一月十一日 一政 拜

謙齋先生 閣下

3 明治 年1月14日 (2338)

奉拜啓候、然は一昨日は遠方御来診被降難有奉万謝候、其後從二位事諸症大ニ輕快之容体ニ御坐候、毎度御苦勞ニは候得共本日御来診奉願候、余は拜眉之上可申上候、不具

一月十四日 一政

謙齋先生 閣下

4 明治 年3月13日 (2336)

前略御免可被下候、然は過日御風氣之御容体被為在、御尋モ不仕多罪御免可被下候、サテ從二位事一昨日迄過日御申置之発泡、膝關節之周圍え相施し候処、少々は滲出物モ相減シ候方ニ御坐候、就ては甚タ遠方御苦勞ニ奉存候得共、今日午后御来診奉願度候、從五位事モ過日来扁桃腺炎にて引籠居候ニ付何卒御一診相願度奉存候

一、杉奥方其後追々輕快之容体ニ御坐候得共、未タ四五日モ相立チ候得は発作有之、其後御来診無之故老母如何哉ト今朝申居候間是又一兩日中御一診奉願候、先は用事迄、草々不具

三月十三日 一政

謙齋先生 坐下

二白申上候、本日午后二時過ナレハ大ニ仕合申候、昨日来当直ニ御坐候ニ付此段申上候、以上

5 明治 年9月15日 (2340)

益御清祥被遊奉大賀候、然は先日は遠方御苦勞被下難有奉謝候、從三位其後齒痛快相成難有奉存候、此後鉄劑之丸薬用度様先日御咄シ御坐候間、近日登堂仕御処方拜承仕度候、先は御礼旁々如此御坐候、草々不具

九月十五日 朝

謙齋先醒 坐下

二白申上候、先日六郎事御一診被下難有奉謝候、委細赤平より承り、其節被仰聞候沃鐵舎利別相用、外ニ意状も無之候、以上

6 明治 年 11 月 27 日 (2339)

別紙木戸より先生遣しクレ候様頼レ御落手可被下候、両三日前より令童腹痛有之今日は大ニ痛軽快仕、何卒御苦勞ニ奉存候得共御一診奉希候、少々アルム之容体も有之何卒御高按之上御処方御記可被下候、余は拜青万々可申上候、草(々)不具

十一月廿七日 一政

謙齋先生 坐下

7 明治 年 12 月 15 日 (2334)

拜啓仕候、然は昨夜遠方御苦勞ニ奉存候、武英事本日〔前八時三十八度四分脈八十搏、后六時三十八度八分脈八十搏〕大便壅行、咳嗽は昨夜よりモ今日は多ク先ツ諸症軽快有之、就ては明日御来診願度、余は拜眉万々可申上候、草々不具

十二月十五日 一政

謙齋先生 坐下

8 明治 年 月 日 (2335)

磯村氏過日一診候処、衰弱甚しく御出院之節御一診奉願候、只今之容体ニ御坐候得は不日遠行之期来り候様愚案仕候、同氏妻モ大ニ氣遣居、当人モ先生近比御出無之、いかゞ哉トグチ斗可申候間是又宜敷奉希候、不備

一政

9 明治 年 12 月 12 日 (2337)

奉拜読候、陳は明十三日他え御約速<sup>(ママ)</sup>被為在候旨被仰越奉拜承候、明後十四日何時比御来診ニ相成候哉御伺申上候、凡其御時刻被仰越候得は其由毛利家え申遣し置候間、此段乍御手数御通報奉希候、右御左右御伺迄如此御坐候、草々不備

十二月十二日 一政

謙齋先生 閣下

10 明治 22 年 4 月 19 日 (2333)

春暖之候益御清祥奉賀候、陳は来ル二十六日芝区烏森町湖月楼ニ於て伊東侍医殿御帰朝并ニ岡侍医殿今回之洋行祝賀ヲ兼ネ宴会相催候間同日午後四時御繰合御来会奉願度、右御案内如此御坐候也

四月十九日 南部一政

伊東政敏

高階経本

田澤敬興

原田 豊

池田謙齋殿 梧下

(注) 明治 22 年 3 月 勅 2 等侍医伊東方成欧州より帰朝。奏 3 等侍医岡玄卿任官のまま自費留学にてドイツへ出発する。

## [102] 萩原三圭の書簡

萩原三圭は明治 21 年より 27 年まで侍医を勤める。三圭の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に 10 通掲載に付き省略。

[103] 橋本綱維<sup>つなこれ</sup>の書簡

橋本綱維は橋本左内の弟、綱常の兄。天保 12 年生まれ。陸軍一等軍医正第 2 旅団軍医部長勤務後明治 11 年 5 月 2 日大阪鎮台病院長に転任。同年 6 月 3 日没。享年 38。(1841-1878)

1 明治 11 年 3 月 30 日 (2404)

(封筒表) 池田謙齋様 侍曹 橋本綱維

(封筒裏) 〆

尔来不任本意無申訳御疎情罷過候、愈尊安御仁務可被成条奉南賀候、扱先頃ハ御転任<sup>(1)</sup>ニ相成恐悅無限奉存候、別て御近辺ニ相成候事故尚更御懇命を蒙度大悦罷在候、此二種ハ無雅不腆之至候得共聊御移住之御祝義申上度寸楮ニ御座候、幸ニ御莞留被成下候ハ、本懐之至御さ候、余ハ登門拜晤ニ相讓右申上度如此御さ候、頓首不陳

三月卅日 綱維 迂医

池田先生 侍曹

(1) 池田謙齋は明治 11 年 3 月 20 日浜町一丁目

より北甲賀町へ転宅。依ってこの書簡は明治11年のもの。

#### [104] 橋本綱常の書簡

橋本綱常は橋本左内の末弟。陸軍々医総監・陸軍々医本部長歴任。綱常の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に20通掲載に付き省略。

#### [105] 長谷川<sup>ごっよし</sup>元良の書簡

長谷川元良は山形県済生館医局長。

1 明治14年1月15日 (2424)

奉賀新年

明治十四年一月十五日

山形県済生館 医局長 長谷川元良  
池田謙斎様 左右御侍史  
副啓

益御清穆御超歳被為遊御座奉恭賀候、尚不相替御願之程奉願候、恐惶謹言

#### [106] 長谷川泰の書簡

長谷川泰は済世学舎を創立し、多数の医学生を養成。又枢要な医療行政に携わる。泰の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に3通掲載に付き省略。

#### [107] 秦呑舟の書簡

詳細不明。書翰の内容より医師と推定した。

1 明治 年2月22日 (2430)

寒気難堪候得共益御清適奉大賀候、陳ハ一婦人肺患ニ罹リ治療罷在候処、病家より大国手之御高診相蒙度旨申出候ニ付、小弟参殿之上可相願答之処、兩三日風邪ニかゝリ不能其儀、就ては乍失敬以書中奉懇願候、御多忙中甚申上兼候得とも一両日中御高診之程奉伏願上候、頓首再拜

二月廿二日夕

秦 呑舟

池田大先生 侍史

#### [108] 服部宣造の書簡

服部宣造は明治12年東大医学部別課卒業生。

1 明治 年10月29日 (2444)

前略、御寛恕可被遣候、陳は本県新潟病院医員<sup>(ママ)</sup>武山屯氏過日出府之際、先生より生へ疾ク御投書被遣候得とも答書無之ニ付、無遅滞報答可仕様同人へ御伝言ニ相成候由、正ニ伝承仕候、然ル処御尊書ハ今以到着不仕、取次之者等聞合セ候得とも更ニ落手不仕由ニ有之、不都合之義ニ罷在候、付ては郵便ニ御差出候哉、亦は幸便ニ御托シ被遊候哉、爰元聞合セ之都合も御坐候間巨細承り度、乍御面倒御通知被成下度此段奉願上候、誠恐謹白  
十月廿九日 服部宣造  
池田先生

#### [109] 花岡(桐原)真節・花岡敏夫の書簡

花岡(桐原)真節は東大医学部教授。明治17年10月7日没。享年46。(1839-1884)。真節の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に4通掲載。未掲載分を記す。花岡敏夫は真節の子息

5 明治 年5月30日 (81)

通学生教授之儀ニ付得拜芝縷々御談申上度、今夕第七時比御在館ニ候哉否奉伺候、即刻若シ御不在ナレハ御帰宅次第御差支之有無医院会計掛迄御通知被成下候様奉冀候、勿々拜白

五月三十日

池田様

桐原・樫村<sup>(1)</sup>

(1) 樫村清徳 東大医学部教授(別課)。

6 明治 年3月21日 (1494)

(前欠)語被成下難有奉存候、先は漸々快方ニ付出院も出来候次第、甚以略儀恐入候得共、一応以書中申上度、孰れ近日拜謁ノ上万(欠)可申上候、草々不悉

三月廿一日 朝

桐原真節

池田先生 閣下

7 明治37年10月8日 (2451)

謹啓、秋清之候益々御壮榮奉賀候、偕て昨日ハ亡父追悼ノ為メ御多用中ヲモ不被為厭遠路態々御来車被下御蔭ニヨリ誠ニ充分ニ追福ノ意ヲ達スルヲ



得、一同欣喜ニ堪ヘズ過分ノ幸栄ト存シ候間、先  
ハ不取敢乍略儀書面ヲ以テ厚ク御礼申上候、敬具  
明治三十七年拾月八日

花岡敏夫  
花岡止郎  
天谷千松  
磐瀬雄一<sup>(1)</sup>

池田謙齋殿

追伸、靈前ニ供物御寄贈被下誠ニ難有御礼申上候

（宛名と追伸を除き印刷物）

（この葉書に池田謙齋の返書の下書きあり）

拜見、陳ハ此程御亡父御年会之節ハ御饗応ニ預  
リ、当方より可申上之処、却テ御懇書ヲ辱し恐  
縮ノ至リニ奉存候、乍末筆御母堂様初メ御一同  
えよろしく御伝声被下度候、敬白

十月十日

謙齋

(1) 磐瀬雄一 明治33年東大医学部卒業。大  
正8年より昭和11年迄東大産婦人科教授。

#### [110] <sup>はやしつな</sup>林紀の書簡

林紀は林洞海の長男。明治12年陸軍軍医総監。  
15年パリにて客死。享年38。紀の書簡は『東大  
医学部初代総理池田謙齋』上巻に12通掲載。未  
掲載分を記す。

13 明治13年4月6日 (1943)

拜啓、然ハ過日ハ失礼而已申上奉恐縮候、扱緒方  
君一条云々<sup>(1)</sup>致承知候、既ニ上申相成候間、早晚  
相驗可申候へ共、出京中トハ相成間敷、多人数之  
事故一人而已速ニ相驗申候訳ニハ参り申間敷候、  
先ハ右申上度、以上

四月六日

紀 拜

謙齋大兄

(1) 緒方<sup>これよし</sup>惟準は明治13年4月28日大阪鎮台病  
院長より陸軍々医監兼薬剤監・軍医本部次  
長・本病院転任を命ぜられる。

#### [111] 原桂仙（圭儼）の書簡

原桂仙は明治3年ドイツ留学。帰国後陸軍二等

軍医正。12年退官後医院開業。桂仙の書簡は『東  
大医学部初代総理池田謙齋』下巻に5通掲載。未  
掲載分を記す。

6 明治 年 月 19 日 (3236)

拜啓仕候、陳は品川大輔殿御不快ニ付、明朝御繰  
合被下御来診被下様仕度奉願上候、拜具  
十九日 圭儼 拜

#### [112] 原田豊の書簡

原田豊は茨城県出身。明治9年東京医学校（東  
大医学部）卒業。明治11年東大助教兼務にて脚  
気病院御用掛。明治19年より27年まで侍医。同  
年6月3日没。享年45。（1850-1894）

1 明治 年 11 月 25 日 (2521)

（封筒表）池田先生 侍史

（封筒裏）<sup>め</sup> 原田 豊

謹啓、陳は一昨日は御多忙中御繰合中山家へ御来  
診被下難有奉謝候、其後御容体格別御異状無御坐  
候得共、昨夜体温三十九度ニ相達し咳嗽も一時増  
発悪所も稍上方ニ広延致候哉ニ被相考候、乍去今  
朝は体温三十七度ニ降下致諸症別段悪候は無御坐  
候得共、本日は何卒御繰合御高診被下度、且薬方  
も可然御指揮之程奉希上度候、右願用迄申上度、  
草々拜具

十一月廿五日

原田豊

池田先生 賢台

2 明治 年 7 月 21 日 (2519)

（封筒表）池田謙齋殿 侍史

（封筒裏）<sup>め</sup> 原田豊

拜啓、陳は中山光久殿本日午後一時四十五分御卒  
去相成候、重々御尽力被下候恐々奉鳴謝候、不取  
敢御報道申上候、勿々稽首

七月廿一日

原田豊 拜

池田先生 閣下

3 明治 年 10 月 31 日 (2520)

謹啓、益御清福奉大賀候、陳は岩倉御後室様昨夕  
申上候以来別段変候も無之、昨夕ハ何にも食事致

不申候得共、夜間安眠致今朝退出掛相見舞申候  
 処、少々之悪心嘔氣之気味は未タ全ク相直不申候  
 得共、真之嘔吐ハ一回も無之今朝は分量ハ少きも  
 昨日よりも稍々濃厚之おもゆ相用候由、先ツ昨日  
 よりハ尚鎮静之姿ニ御坐候、然ルニ昨夜十時頃之  
 尿水只今試験仕候処、沈殿物(昨日申上候者)ハ  
 著敷減少致候得共、尿色濃厚少々緑色相帯候付胆  
 汁相検候処輕微之反応相呈候様被存候、手当は凡  
 て昨日通り内服剤は何にも相与不申只滋養灌腸料  
 ノミ相施、食事も昨昼ニは数条之うんどん相用候  
 由ニ候得共、可相成液体はおもゆノミ相用候様申  
 置候、何卒本日午後御見舞之上可然御指揮之程奉  
 願候、先は御容体大略申上度如此御坐候、頓首  
 十月卅一日 原田 豊  
 池田先生 閣下

4 明治 年9月13日 (2518)

拝啓、陳は小池孫六氏親戚月形紀と申者、先月初  
 旬来赤痢ニ相罹り療養中、中旬頃より満身浮腫致  
 候処、五六日前より浮腫漸々増進加之昨夕より心  
 調不正トナリ、時々呼吸不和胸内苦悶等之症状発  
 作致候ニ付、右小池氏殊之外心痛致し、是非とも  
 先生へ御一診相願度旨申出候間、此程甚々申上兼  
 候得共一度御高診被成下度偏ニ奉願上候、右願用  
 迄申上度、余は拝顔之上万縷可申上候、頓首  
 九月十三日 原田 豊  
 池田先生 閣下

5 明治 年12月4日 (2517)

拝読、陳は御奥様御病氣其後御順快昨夜御入浴御  
 試被遊候由愈御全快之御事と奉存候、就ては御全  
 快御届書別紙老葉差上申候間、御都合次第御差出  
 之程奉願上候、右貴酬迄、草々頓首  
 十二月四日 原田 豊  
 池田先生 閣下  
 尚々小供へ美菓御恵投被下難有奉謝候、乍序御  
 礼申上度奉存候也

[113] 樋口立卓の書簡

詳細不明. 書翰の内容より眼科医と推定した

1 明治16年7月16日 (2540)

(はがき表) 駿河台北甲賀町

正五位 池田謙齋様 執事御中

呉服町二十番地発 樋口立卓

(消印 東京・一六・七・一六・り)

(郵便はがき 五厘)

(はがき裏)

前略御免可被下、然は過日以來奉願置候眼病婦女  
 手術儀如何御座候也、申延候末小生拙業ニ付申逃  
 候様ニて困却仕候間、何卒御救助被下間敷候哉、  
 御繁忙御座候は貴宅ニても宜、外ニ内障眼老人有  
 之候間、此又一応御相談奉願候、貴答奉待候

七月十六日

[主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日 日本歴史人物事典』朝日新聞社  
 1994年11月30日発行

池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋』上・  
 下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981  
 年9月10日発行

吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』より 遠藤  
 正治著「明治期の侍医制度と池田文書」思文閣出版  
 2001年5月11日発行

大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20  
 日発行

稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術  
 1973年5月15日発行

(本稿に於いて詳細不明の医師 半井成禎・秦吞  
 舟・樋口立卓に就きご知見のある方は順天堂大学  
 医学部医史学研究室までお知らせ下さい。)